

研究題目：幼児におけるGボールとのファーストコンタクト

研究者氏名（所属）：○板谷厚（助成を受けたときの所属：岐阜聖徳学園大学短期大学部、現在の所属：北海道教育大学旭川校）、古屋朝映子（助成を受けたときの所属：筑波大学体育系、現在の所属：川村学園女子大学）、田村元延（常葉大学短期大学部）

報告

1. 目的

本研究は、幼児がGボール遊びを初めて行う際、どのような遊びに興じるかを調査し、保育現場にGボール遊びを導入するための基礎的な知見を得ることを目的とした。調査の着眼点は、1. 子どもたちが自発的に遊ぶ中で、Gボールの3つの性質（弾む、不安定、転がる）のうち、どれを好むか；2. どのような姿勢で遊ぶか；3. 落下や転倒の発生頻度；4. 安全性を確保するための諸注意の有効性；5. 幼児がGボールに慣れていく過程および、6. これらの男女差とした。

2. 概要

岐阜聖徳学園大学附属幼稚園の年長児（22名）を対象とした。運動遊びの時間にGボールの指導を行い、その際の幼児の様子をビデオ録画して記録した。Gボールの指導は、はじめに安全のためにGボールで遊ぶ際の注意事項を5分間程度で確認した後、10分間程度自由に遊ぶ時間を設けた。この自由遊びの時間のうち、子どもたち全員にボールが行き渡った後の8分間を分析対象とした。ビデオ分析ソフトゲームブレーカーを用い、どんな遊びをどのタイミングで、どれくらい遊んだかを個々の幼児について記録し、分析した。

3. 結果（または成果）

分析時間の中で子どもたちが興じた遊びの種類は一人あたり 8.0 ± 1.6 （平均値±標準偏差）であった。Gボールの弾む性質を利用した遊びが自由遊びの約半分の時間（ 46.0 ± 22.2 [%]）を占め、子どもたちは弾む性質を利用した遊びを好んだ。一方、不安定性を利用したバランス遊びを試みることはほとんどなかった（ 1.7 ± 3.2 [%]）。立位で遊ぶ時間が最も長く（ 65.8 ± 20.0 [%]），次いで座位（ 19.4 ± 19.7 [%]），臥位（ 12.5 ± 9.2 [%]）の順であった。女児は男児に比べて、Gボールに慣れるにしたがい臥位（Gボールにおなかで乗る、すべる）の時間が多くなった。意図しないGボールからの落下や転倒は17回認められたが、いずれもケガにつながる危険性は低いものであった。Gボールを使用するにあたっての諸注意は子どもたちに理解され、よく守られていた。

これらの結果から、Gボールは幼児にとってはじめて触れた時から自発的な遊びを誘発する優れた遊具であることが明らかになった。注意事項はよく守られており、子どもたちは安全に遊ぶことができたと考えられる。加えて、結果からバランス運動は幼児にとって比較的難しいと考えられるが、幼児は無謀な遊びを避ける傾向があるとも推察できる。以上から、Gボールは、少なくとも保育者の監督のもとでは、安全に自由遊びを行える遊具であることが示唆される。

なお、次の論文および学会にて研究成果を発表した。

板谷厚：連載 遊びの世界 25 用具を遊ぶ、こどもと発育発達、13、印刷中

板谷厚：幼児が初めてGボールに触れるとき。教育医学、60（第62回日本教育医学会大会抄録集）、pp.49-50、岐阜大学、2014. 8